

五台山清凉寺は小倉山の東なり。〔嵯峨釈迦堂と称す〕

本尊は大聖釈迦牟尼仏の立像にして、長五尺二分、天竺毘首羯磨天の作なり。脇士は十大弟子の立像共に厨子に安置す、東西の壇上には文珠普賢を安置す。抑此尊容は三国無双の靈仏にして、釈尊在世にうつし奉りて、生身の尊像なり。如来の御母摩耶夫人釈尊を誕生しまして、後七日に薨じ給ひ、■利天に生れ給ふ、釈尊成道し給ひて、祇園精舎よりかの天に登り、御母の為に説法し給ふ事一夏九旬の間なり。此時四衆の輩釈尊を見奉らず、憂愁する事甚し。然るに優填王つねに渴仰ありければ、尊体をうつし奉らんとて、宝蔵の香木赤梅檀をえらびて、天匠毘首羯磨にあたへり。目蓮尊者は神通を以て仏の円相をうつしあたへ給へば、尊容速に成就して祇園精舎に安置せり。釈尊安居の御法をはりて本土に帰り給ふ。其時木像水精の御階をあゆみて、生身の仏を迎ひ給ふ。釈尊木像に宣われ、涅槃遠きにあらず、来生の衆生を化度あるべしと、共にあゆみて祇園精舎に入給ふ。当寺の本尊是なり。夫より唐土に渡り、宋の代に至つて本朝一条院の御宇永延元年、南都東大寺の衆徒法橋■然渡唐し、靈告を蒙りて此尊像を感得し奉り。帰帆して同年八月十八日天聴に達し、伽藍を建立し清凉寺と号す。〔以上縁記の大意〕

阿弥陀堂〔棲霞寺と号す、嵯峨帝の皇子融大臣の宮給ひし棲霞関なり。〕（源順賦を書り。）本尊は阿弥陀觀音勢至の

三尊なり。旧嵯峨帝の離宮ありしとき、化人來つてこれを彫刻す、造り終つて酉の刻に去る、此故に作人を酉と号す

五大堂〔宗旨真言にして、本尊は五大尊弘法大師の作なり、中頃二尊回祿して、今は不動、大威徳、軍陀利の三尊を安

置す」にちゆうのたふ〔二重塔〕〔本尊は多宝仏を安置す〕三石塔たふ〔五大堂の前にあり、嵯峨天皇、檀林皇后、融とほるのをと大臣の三塔なり〕八宗はつしう論池ろんのいけ〔弘法大師此池の汀にて諸宗の僧と対論し給ふ所なり〕棺掛楼くわんかけさくら〔池の傍にあり、嵯峨天皇崩御のとき、御遺詔により御棺を此楼にかけしとぞ〕四ツ足門あしもん〔西の門をいふ。むかし本堂建立の時、一七日參籠する人あり、ある夜の夢に、本尊告て曰、汝が父は今畜生と生れて材木を牽牛となれり、追善を修して仏果を得せしむべしとありしかば。覺て後、靈告肝にめいじ、悲歎してかの牛を乞得て養ひしが、三月十九日命終りければ、其とき牛に着せたる衣をもつて如来にょらいの御肌を拭ひ、又牛の骸をつゝみ、此門の下に葬る、かるがゆゑに四ツ足門あしもんといふ。又其牛の皮をはぎ如来の華曼くわまんにかくる、今当寺の什物となる〕

大念仏だいねんぶつ〔毎年三月五日より十五日迄なり、円覺上人えんがくこれをはじむ〕御身拭おみののぐひ〔三月十九日大念仏の間貴賤群集して、如来の尊容そんように埃のかゝりければ御身を拭ふなり〕

続 古 鷲の山二たび影のうつりきてさかの、露に有明の月

寂蓮法師